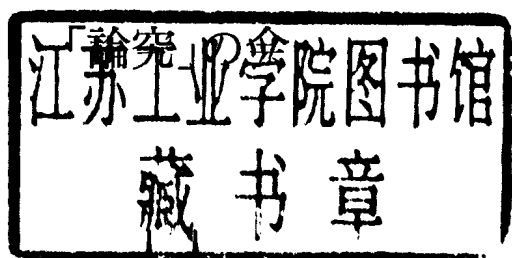


平野謙研究

「論究」の会



# 平野謙研究



国文学研究叢書

明治書院

編集

石阪幹将

石本太郎

大竹雅則

小川武敏

黒崎峰孝

津田洋行

矢野昌邦



国文学研究叢書



平野謙研究

定価 2,800円

昭和62年11月20日 発行

編 者 論究の会

発行者 株式会社明治書院

代表者 三樹彰

印刷者 柳沢印刷株式会社

代表者 柳沢一郎

製本所 正文社製本



発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16

郵便番号 101

電話 東京(03)292-3741(代)

振替口座 東京3-4991番

©1987 Ronkyû no kai

ISBN 4-625-58050-1

もくじ

第Ⅰ部

- 一 平野謙——人と作品……………中山 和子……………3
- 二 平野謙の転向についてのノート……………石本 太郎……………33
- 三 「政治と文学」論争考・序——平野謙と中野重治……………島田 昭男……………51
- 四 平野謙の伝記的批評——「芸術と実生活」論を中心に……………石阪 幹将……………78

第Ⅱ部

- 一 平野謙と夏目漱石……………大竹 雅則……………103
- 二 平野謙と正宗白鳥……………長江 曜子……………123

|   |                                  |            |     |
|---|----------------------------------|------------|-----|
| 三 | 平野謙と志賀直哉——「私小説の二律背反」に即して……………    | 宮越 勉……………  | 141 |
| 四 | 平野謙と広津和郎……………                    | 吉田 悦志…………… | 163 |
| 五 | 平野謙と竹内仁……………                     | 小林 広一…………… | 182 |
| 六 | 平野謙と若林つや——小林多喜二・三人の愛人説をめぐって…………… | 阿部 浪子…………… | 201 |
| 七 | 平野謙と伊藤整——その出会いをめぐって……………         | 曾根 博義…………… | 217 |

## 第Ⅲ部

|   |                     |            |     |
|---|---------------------|------------|-----|
| 一 | 政治と文学論争覚書……………      | 小川 武敏…………… | 239 |
| 二 | 平野謙・純文学論争とその後……………  | 矢野 昌邦…………… | 259 |
| 三 | 平野謙・論争関係主要著述目録…………… | 黒崎 峰孝…………… | 280 |

|                |            |     |
|----------------|------------|-----|
| 平野謙参考文献目録…………… | 津田 洋行…………… | 292 |
|----------------|------------|-----|

|           |  |     |
|-----------|--|-----|
| あとがき…………… |  | 326 |
|-----------|--|-----|

# 第I部



# 一 平野謙——人と作品——

中山 和子

平野謙、本名平野朗は明治四十年十月三十日、父履道、母きよの長男として京都に生まれた。父は藤村と同じ明治五年生まれで三十五歳、母二十一歳である。出生後、東京府豊多摩郡戸塚村大字諏訪に移住し、大正元年、父の郷里岐阜県稲葉郡那加村（現、各務原市西市場町）法蔵寺に移っている。かつて「早稲田文学」編集部に入り文芸評論を書いたこともある父履道（平野柏蔭）が、学芸の世界を断念し東本願寺末寺の法蔵寺住職として、半生を送ることに決めたからである。

「四十歳、人生半ばをすぎた父がやむを得ず住職となったように、二十六歳の母は自分の気持ちを抑えて父に従い住職の妻、つまり寺の坊守りとなった<sup>(1)</sup>」とされている。一俸給生活者の娘で京都市であった母は、檀家三百五十軒の寺の坊守りがどんなものか知らず夫に従ったのである。

そういう両親にはぐくまれたから、物ごころついて以来寺に育ちながら、平野朗は寺の子弟らしい

教育も扱いも受けなかった。父履道は、在京時代の文壇と文学の話をなつかしそうにたびたび口にしていた。紅葉、露伴、独歩、一葉、二葉亭、鷗外、鏡花、白鳥その他がばんばん飛び出し、「逍遙については恩師の関係でもっとも話題にのぼる頻度が多く、教室でのハムレット、マクベス、ベニスの商人などの訳読の口まねなどをたびたびきかされた」ということである。それらの会話は主として中学生の朗と父との間でとり交わされ、無視されていつも不満であった弟シゲルがある時、「トウヤ」について発言すると、「すかさず兄が『それはトウコク（透谷）と読むんだよ』と訂正し、間髪をいれず父が『シゲルはそういうところが常識がない』と噛んで棄てるように言い放った」という。平野父子の面影が彷彿とする逸話である。平野朗はこの父履道が、見果てぬ文学の夢を託した最愛の息子であった。

特別に農家の離れを借りて机に向かい、「文章倶楽部」「新潮」「文芸時代」などを定期購読しながら、朗は根っからの文学少年として成長していった。

岐阜中学卒業の大正十四年、「文芸日本」の特集「コント号」に「指」が入選している。コントは大正末から昭和初年にかけて流行したモダニズム文学の一現象で、短篇小説の一形式であるが、いち早く反応したわけである。

美しい指が自慢で、毎日うっとり見惚れているようなナルシスティックな少女が、ある日季節はずれの手袋をしているのを見かける。実は美しい指に「醜い疣」が芽を出したためだった、という軽く

シニカルでユーモラスな味わいのある都会風コントである。

「あのころの新しいもの、そして繊細でしゃれた味のものが最も好きだったんじゃないか」(藤枝静男)、「都会風の、気のきいた、新しい感覚のものの方へ行く性質はあつた」(本多秋五)と回想されるゆえんであろう。

初期習作はほかに第八高等学校校友会誌に発表されたものがある。

「何も見えない／何も匂はない／底知れぬ寂寥の沼」へ降りてゆく恐怖を、ナイーヴに表現した詩「死」(昭3・7)は、生涯ほとんど「実存」を批評の問題としなかった平野謙に、めずらしいものである。

ほかに、眠っている女の乳房を撫でる少年の、かすかにエロティックな気持ちの微妙さを描いた小説「追憶」(同)、大家族を<sup>(4)</sup>かかえる父親の機嫌をとるかのよう<sup>(4)</sup>に、高校生の長男が父と文学談を交わす小品「わが家の平和」(昭4・3)などがあるが、最も優れているのは、電車通学の中学生のはかなく清純な恋を描いた「稚恋」(昭4・5・11)であろう。

これら自己周辺に取材して無理のない、端正で繊細な作風をみれば、まもなくプロレタリア文学運動に接近する平野朗が、生得の感性といかにあらがわねばならなかったかを了解することができる。

「『わが家の平和』」の結末をみても逍遙の口まねなどをした朗の父は次第に年とってきたことが知られるが、長男朗は、父親の望んだようなコースを歩まなかったのである。

平野謙自筆年譜によれば、昭和五年東京帝国大学文学部社会学科に入学し、入学と同時に学内のR S（読書会）に所属した、とある。そうだとすれば左翼への関心は高等学校時代にもいくばくかあった模様である。戦後、「昭和文学のふたつの論争」（昭22・10）のなかで次のように述べている。

もし中野が「春さきの風」を書かず、「いはゆる芸術の大衆化論の誤りについて」を書いてゐなかつたら、私はマルクス主義に近づかうとはしなかつたかもしれぬ。おそらく荒正人とは異なつて、私はマルクス主義文学に純粹無垢な状態でひきよせられたものではない。あんなものが自分のめざしてきた文学であつてたまるかといふ気持と、しかし、文学インテリゲンツィアとしての自己を窮極に救つてくれるものはここにしかないとする気持がながく私の身うちでせめぎあつた。私はわづかに、中野重治ひとりをみつめ、身をすててこそ浮ぶ瀬もあれ、と一種絶望的な祈りに似た気持をこめて、マルクス主義運動に近づいていったものである。かくて私は決定的な青春の一時期をマルクス主義文学運動の影響下においた。

昭和初年の若い平野謙が、当時上げ潮に乗った急進的な青年知識人たちのマルクス主義文学運動に近づいていった道筋は、ここにはぼつくさされているだろう。

「春さきの風」の「戦旗」発表が昭和三年八月のことであり、「いはゆる芸術の大衆化論の誤りについて」が蔵原惟人との間に論争をおこしたのは、同じ年の六月から十一月のことである。もし、発表の時点で中野重治を読み、その新しい芸術的感性、きびしい韻律やストイックな抒情に圧倒されていたのだとすれば、おそらく習作「稚恋」のように優しくはかない世界に執着することはできなかったであろう。「春さきの風」は『鉄の話』（昭5・6）に収録されたとき熟読され、同時に論争も再読され、平野謙のマルクス主義文学運動への関心は大学入学後急速に昂まったのである。

しかし、中野重治をのぞけば、「あんなものが自分のめざしてきた文学であつてたまるか」という、はげしい違和と不満を抱いた。にもかかわらず、「文学インテリゲンツィアとしての自己を窮極に救つてくれるもの」はそこにはないと思う気持ちもいつわれなかった。時代の空氣に鋭敏な青年の、それは若々しい直感であつたと考えられる。

しかし、プロレタリアートの解放という歴史的使命を、知識人の革命的自己変革によって主導するという、当時の青年たちのラディカリズム、極左浪漫主義とくらべるとき、平野謙の場合はきわめて受け身である。知識人である自己は救済する者であるより、される者であつた。ここに平野謙のマルキシズムがつねに知識人論と関連してあり、實在の「民衆」の問題を欠如させる理由がある。ともあれ、まことに「絶望的な祈りに似た気持」を抱いて、平野謙はのろのろとマルクス主義運動に近づいていったのである。

昭和六年春頃、全協（日本労働組合全国協議会）所屬の日本通信労働組合書記局に入り、街頭連絡や文書配布などして半非合法の生活に入った。平野謙にそうした実践をうながしたのは、八高で同級だった本多秋五である。寮で同室だった藤枝静男は、「ほとんど悲鳴に近い云い方」で、「政治優先」の止むを得ないことを云う、若き日の平野謙の姿を描いている。<sup>(5)</sup>

当時、生江健次「過程」（昭6・4）を愛読し、主人公の学生が逮捕をおそれ、ついに八王子で野宿するような「追いつめられた繊細な心情に、心から同感することができた」とのちに平野謙は語っているが、逡巡をくりかえし、苦しい自己否定をこころみながら、中野重治という光源に魅かれて歩んだ知識青年のこうした行程は、昭和初年という時代の嵐の激しさを、如実に示すものであろう。

対談「戦後文学二十五年」（昭45・12「群像」）のなかで、平野謙は、「昭和文学の特徴はみな資質に反しているといえないこともない」と発言し、「横光利一など資質に反した一典型だと思う。資質に反してああいう新感覚派的な仕事をずっとしてきた。だからこそ彼は何といっても昭和文学の代表的作家なんですよ」とのべている。横光と対抗的な中野重治のうえにもそのことを認めたい思いが平野謙にはあるようだが、何よりも平野謙自身のうえに、そのことを承認しなかったのではないか。

自己の宿命との闘い、という宿命を負って昭和の青春を生きたものの痛切な感慨である。

若い平野謙にその宿命の自己否定を、ひそかにしかし強力にうながした文章があった。井上良雄「芥川龍之介と志賀直哉」（昭7・4「磁場」）がそれである。

文学が何よりもわれわれの肉体的な行動であるならば、われわれの文学上の転換は、最早意志や努力を超えた、何か宿命的な困難さを蔵してゐるといふことを、今も尚私は疑はない。併し、今はわれわれの周囲にある文化の廃頹が、既に最期的なものであることを思ひ、われわれの前にあるものが最早ただ宗教、狂気、自殺のいづれかのみであることを思ふならば、われわれの過去の文学的経歴がどうしてわれわれにとつて宿命的であつてよからう。あつてはならないのだ。そして、宿命であつてはならないといふこの直接自然な感情こそ、それが宿命的でないことの唯一絶対的な保証であると、私は信じてゐる。——この事を教へて呉れたのも、私には志賀直哉氏以外の人ではなかつた。(傍点井上)

平野謙はそれ以前から「ほとんど肉感的親近性」をおぼえていた井上良雄が、「ここまでにじりよつた」ところの闘いを想つて、「涙をとどめることができなかった」とのべている。<sup>(?)</sup>破格の感動である。

それにしても、井上良雄が「併し」という一箇の接続詞を境に、反転させてゆく論理のたたみ方は、論理をこえた何ものかによるのであつて、断涯に迫いつめられ切羽詰まった若者の飛翔をみる思いがある。「ほとんど祈りに近い心情」とのちの平野謙は評したものである。「社会主義の中でのみ、個人は最早どのやうな人間的自己疎外も知らない、最高の個人として生き得る」という、この時

の井上良雄に、祈りに近い信頼を平野謙は「護符」のように抱くこととなった。処女評論「プティ・ブルジョア・インテリゲンツィアの道―唐木順三氏の『現代日本文学序説』を読んで」(クオータリイ日本文学)昭8・1)を書き、「観想的客観主義者」に後退した唐木順三のようにでなく、井上良雄のように、「客観的現実の変革者」にまで自己を高めようと、けなげにも平野謙は覚悟している。

やがてプロ科(日本プロレタリア科学研究所)を経て、コップ(日本プロレタリア文化聯盟)書記局メンバーとして働くが、かたわら荒木信五、小林良雄の筆名で評論、随筆を発表した。

\*

昭和九年一月、いわゆる「リンチ共産党事件」が新聞報道され、平野謙は「電撃的」な影響を受けた。

昭和七、八年は日本共産党が創立以来の激しい弾圧にみまわれた時期で、党中央に集中的検挙がおこなわれ、数千の活動家が投獄されている。岩田義道も小林多喜二も特高警察の拷問により惨殺された。野呂栄太郎の検挙にいたり、組織中央へのスパイ潜入が確実なものとされ、宮本顕治ら中央委員四名が、他の中央委員、小畑達夫、大泉兼蔵をきびしく査問した。査問中、小畑が急死し、大泉はスパイであったことを自白し、遺書を書いて自殺の用意をするが、すきをねらって警察へ逃亡した。―これがリンチ事件のあらましである。

平野謙の「口にはいえぬようなショック」<sup>(8)</sup>は複雑なものがあるが、小畑はスパイでないのに殺され

たのではないか、という疑惑はなかった。当時の平野謙に、小畑らがスパイであることは党中央が判断した以上明らかで、スパイの運命は自殺にしるリンチ殺害にしる止むを得ぬ事態——小林多喜二は殺されたではないか——という受けとめかたがあったようであり、ショックはむしろ敵味方喰うか喰われるかの緊迫した政治情勢の危機感のほうが大きかったようだ。さらに平野謙にとっての衝撃は、かつて半月以上も下宿に同居させ、下着や交通費の面倒までみ、革命的労働者として信頼した小畑達夫が、党中央委員に「なりあがっていたこと」である。平野謙は一貫して小畑スパイ説を主張し、最晩年に事件の意味を解明して『リンチ共産党事件』の思い出』（二一書房 昭51・6）一卷を書きあげた。そこに、実は平野謙固有の体験がかくされていたのである。

藤枝静男は平野謙追悼座談会で、次のような若い日の平野謙の打ち明け話を披露している。

（平野が）恋をして、結婚したいというような意志表示をしたらしいな。そうするとその女のは、いや、自分はあなたと一緒にいると今後進歩しない、……思想的に成長しないと思う、もっとしっかりした人に指導されて運動のなかにすすんでいきたい、だからあなたの申し出を承知するわけにいかない、と云われたと平野はそういったな。平野は非常に落胆したが、けれども平野のことだから、そうか、それならば已むを得ない、というふうに彼はすぐ反省するたちだから、そうして別れたんだ。近所の薬屋から赤玉ポートワインを一本買ってきて、それで別れの盃をかわした。：

…それを飲んで、そうしてキスしてくれといってキスしてもらって別れた。女は出ていったんだな。(『平野謙・人と文学』、「群像」昭53・6)

「あなたと一緒にいると今後進歩しない」という愛する女性の率直なひとことが、感じやすい心にかにみじめな傷痕をえぐったことか。しかし平野謙はよく耐えた。昭和七年始め頃のことかと思われる。その年の暮に、井上良雄にならって、自己革命を志したあの処女論文を執筆していたことになる。「もっとしっかりした人」を希んだその女性が、平野謙のけなげな覚悟をひそかに背後からうながしたのはまちがいないであろう。

しかし、市ヶ谷刑務所長の娘、津田塾出身の美しいその女性根本松枝は、小畑達夫のハウスキーパーとなったのだった。平野謙が生前ついに書かなかった小畑への「個人的な怨念」とは、この運命的な三角関係をさしている。

昭和八年四月横浜で逮捕された根本松枝は、全協、日本金属フラク中村亀五郎内妻、銀座のカフェーの女給として大金を貢いでいると報道された。聡明な根本松枝の運命をそこまで狂わせた、そもその男は小畑であり、女を手段としてはばからぬハウスキーパーという奇怪な制度である。戦後の平野謙がハウスキーパー制度を執拗に問題にしたのは、そう思う奥深い怨念がからんでいた。その小畑達夫がスパイであり党中央に潜入していたという事態は、平野謙に革命組織の恐るべき脆弱さを思い知